

感染症発生動向調査委員会報告 10月

今月のトピックス

レジオネラ症の報告数が、今年に入ってから27例と多い
RSウイルス感染症、インフルエンザは昨シーズンと同様に早く増加の兆し
百日咳の報告数は昨年より多く、DPT接種歴のある幼児においても発生している

【患者定点からの情報】

市内の患者定点は、小児科定点：88か所、内科定点：57か所、眼科定点：18か所、性感染症定点：26か所、基幹(病院)定点：3か所の計192か所です。なお、小児科定点は、インフルエンザと小児の13感染症とを報告します。内科定点はインフルエンザのみを報告します。従ってインフルエンザは、小児科と内科で、計145定点から報告されます。

平成20年 週 - 月日対照表

第39週	9月22～28日
第40週	9月29～10月5日
第41週	10月6～12日
第42週	10月13～19日
第43週	10月20～26日

平成20年9月22日から平成20年10月26日まで(平成20年第39週から第43週まで。ただし、性感染症については平成20年9月分)の横浜市感染症発生動向評価を、標記委員会において行いましたのでお知らせします。

全数把握の対象

< 腸管出血性大腸菌感染症 >

10月の報告数は、30日現在で5例です。うち、10代の女性がHUSを起こし入院となりました。年齢の内訳は、10代が1例、20代が1例、30代が2例、40代が1例でした。

< レジオネラ症 >

10月は30日現在で5例の報告がありました。1月からの報告数は27例となり、多かった昨年1年間の28例に近い報告数です。うち、40代の男性がレジオネラ症と診断された後に亡くなっています。

全国でも、第43週までの累計は738例と、すでに昨年の報告数を上回っています。(表参照)

レジオネラ症の報告数の年別推移(2000年～2008年43週)

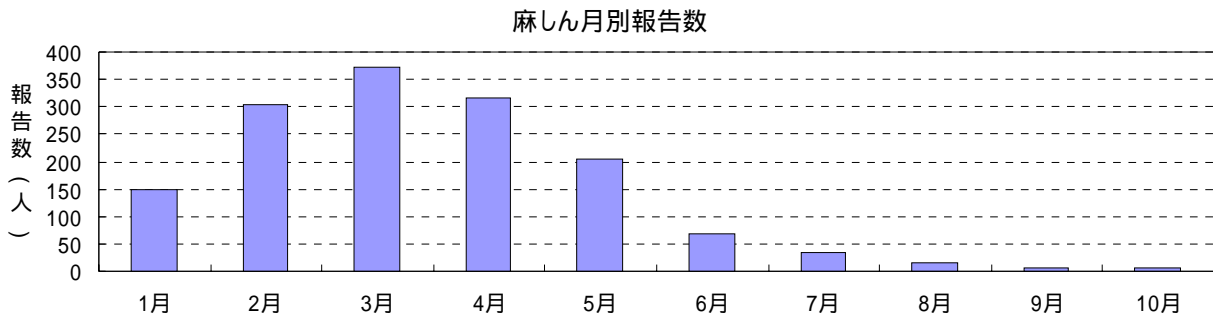
	2000年	2001年	2002年	2003年	2004年	2005年	2006年	2007年	2008年
全国	154	86	167	146	161	281	514	665	738
神奈川県	2	2	4	6	6	19	26	43	46
横浜市(再掲)	0	0	3	2	1	8	7	28	27

レジオネラ症については、2003年4月より、尿中レジオネラ抗原検査が保険適用になり、診断が迅速に出来るようになりました。しかし、レジオネラ肺炎は、早期に適切な治療(マクロライド系、ニューキノロン系、リファンピシンの投与等)を行わないと、症状が急激に悪化したり、致命的になる場合があります。高齢者や、糖尿病などの基礎疾患がある人は注意が必要です。また、肺炎患者においては、循環式浴槽やジャグジーなどの入浴施設の利用を確認する事も必要と思われれます。

< 麻しん >

1月から感染症法の5類感染症の全数把握の対象となり、診断した医師すべてに届出が義務付けられました。(国立感染症研究所ホームページ <http://idsc.nih.go.jp/disease/measles/index.html>)

横浜市では、第43週(10/20～26)までの累計報告数は1474例で、全国の報告数10871例の13.6%です。最近5週間(第39週～第43週)の報告数は8例で、全国の報告数77例の10.4%となっています。年齢別では、約半数が10代で、予防接種前の0歳にも多く発症しています。また、全体の約半数が予防接種未接種でした。



2012年の麻しん排除に向けて、予防接種の徹底が最も大切です。

横浜市では、緊急対策として、未接種・未り患者への市費による予防接種(任意接種)を実施しています。

<http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/oshirase/mr-kinkyu.html>

1歳～高校3年生に相当する年齢の未接種・未り患者は、この機会に早めに接種していただくことが重要です。

横浜市の詳細については、「横浜市における麻しん患者届出状況(2008年)」

<http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/rinji/measles/measles.html> をご覧ください。

《日本は、2008年～2012年の5年間で、麻疹排除を目指します》

風しんとともに全数報告疾患として、発生状況等を詳細に把握

1歳および就学前1年間の、麻しん風しん混合ワクチンによる2回接種の徹底

5年間に限り、中1及び高3相当の年齢の者への定期接種を実施

定点把握の対象

< インフルエンザ >

第40週に今シーズン初発のA型インフルエンザの報告が戸塚区からあり、第41週には栄区からB型インフルエンザの初発の報告がありました。初発の報告は、過去6年間で最も流行開始が早かった昨年と同時期です。

これまでに、戸塚、栄、瀬谷、鶴見、旭、金沢の6区から報告があり、第43週の定点あたり報告数は0.07でした。これから流行期に入っていくと思われるので注意が必要です。神奈川県(横浜、川崎を除く)は0.01、川崎市は0.00、全国は0.06でした。

横浜市では、高齢者の方がインフルエンザ予防接種を受ける場合、接種費用の助成を行っています。

http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/influenza/influ_yobou.html

< RSウイルス感染症 >

例年冬季に流行が見られますが、今年は立ち上がり早く、第37週から増加の兆しが見られ、第42週には定点あたり0.49、第43週は0.47と過去のピーク時に近い値となりました。今後も増加の可能性がありますので動向に注意が必要です。神奈川県(横浜、川崎を除く)は0.26、川崎市は0.55、全国は0.59でした。

< A群溶血性レンサ球菌咽頭炎 >

今シーズンは過去6年間で最も高い値で推移しています。第43週は定点あたり1.22でした。行政区別では港北区(5.00)、中区(4.67)が高くなっています。今後の動向に注意が必要です。川崎市は2.39と高く、神奈川県(横浜、川崎を除く)は0.95、全国は1.42でした。

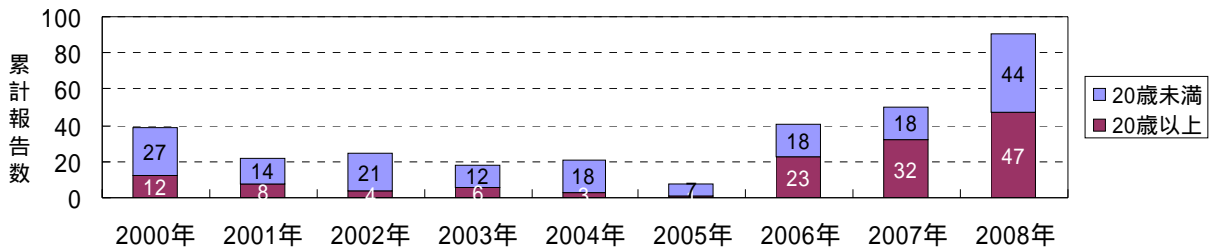
<手足口病>

第30週に定点あたり4.06とピークを迎え、その後はあまり減少せず、第43週は定点あたり1.52と流行が小さかった年のピーク時くらいの値を推移しています。行政区別では、磯子区(5.25)、港南区(3.60)、中区(3.33)となっています。秋に小さな流行が見られることがありますので今後の動向に注意が必要です。神奈川県(横浜、川崎を除く)は1.18、川崎市は0.45、全国は0.85でした。

<百日咳>

第43週は13例の報告がありました。1月からの報告数は91例となり、現時点ですでに昨年(2007年)の報告数50例を大きく上回っています。成人とともに、DPT接種後の幼児の報告も見られており、今後注意が必要です。

百日咳の累計報告数の年別推移(2000年～2008年第43週)



<性感染症>

性感染症は、診療科でみると産婦人科系の11定点、および泌尿器科・皮膚科系の15定点からの報告に基づき、1か月単位で集計されています。

9月は、8月に比べて性器クラミジア感染症はやや増加傾向ですが、他は横ばいです。19歳以下の若年層については、男性は性器クラミジア感染症で3例、女性は性器クラミジア感染症で2例、性器ヘルペスウイルス感染症で1例、尖圭コンジローマで1例、淋菌感染症で1例と、8月に比べて多くなっています。

【病原体定点からの情報】

市内の病原体定点は、小児科定点:8か所、インフルエンザ(内科)定点:5か所、眼科定点:1か所、基幹(病院)定点:3か所、の計17か所を設定しています。検体採取は、小児科定点8か所を2グループに分け、4か所ごと毎週実施し、インフルエンザ定点は特に冬季のインフルエンザ流行時に実施しています。眼科と基幹定点は、対象疾患の患者から検体採取ができた時に随時実施しています。

衛生研究所から

<ウイルス検査>

2008年10月に病原体定点から搬入された検体は、小児科定点は27件(鼻咽頭ぬぐい液)、基幹定点は7件(髄液3件、血清2件、咽頭ぬぐい液、喀痰各1件)でした。患者の診断名別内訳は、小児科定点は上気道炎10人、気管支炎8人、手足口病8人、下痢1人、基幹定点は、脳炎・脳症2人、肺炎、発疹、播種性血管内凝固症候群各1人した。

11月10日現在、小児科定点の手足口病患者6人からコクサッキーウイルスA16型(5人)、エンテロウイルス71型(1人)、上気道炎患者2人からパラインフルエンザウイルス2型、別の上気道炎患者1人からポリオウイルス1型、下痢症患者1人からポリオウイルス2+3型が分離されています。これ以外にPCR検査では、小児科定点の気管支炎患者4人と上気道炎患者2人からRSウイルス、手足口病患者2人からコクサッキーウイルスA16型が検出されています。

その他の検体は引き続き検査中です。

(毎年4月と10月に、ポリオウイルスの予防接種が実施されています)

<細菌検査>

10月の感染性胃腸炎関係の受付は7菌株で毒素原性大腸菌が1件検出されました。溶血性レンサ球菌咽頭炎の検体の受付は4件でA群溶血性レンサ球菌が4件検出されました。